

「セ・ロム」はゲーテの人柄をナポレオンにして「セ・ロム」(これぞ、人間だ!)と言わしめた伝説の言葉。
「エッセイの森」は面白く、有意義な読み物(木々)がたくさん集まり、森の如く知の緑を成す(SDGs)ことを意味する。

ジヨークサロン会員／リレーエッセイ⑧

『北海道の山奥の小学校が人生の出発点』

東京の小学校から1年生の2学期(37・1962)に、北海道の上の国の山奥の「若葉小学校」に転校した。電車が行きかう大都会から何もない山の中に、あまりにも環境の差があり過ぎ、驚いた。父が鉱山技師として東京本社にいたが、北海道の「上ノ国鉱山」を希望したからである。

その鉱山の主な採取する鉱物はマンガンで元素記号ではMn、漢字では、満俺、父の思い入れで私の名前の一字に入れたようだ。二酸化マンガンのイメージで、黒い印象があるが、原石は淡いピンク色。会社でこの石を磨いて、装飾品として、ペンダント、指輪等を作り出す試みたが、あまり売れなかったという笑い話として残っている。転校したことですべてが一転した。特に周りは自然に囲まれ、都会とは異なる自由の世界であった。この新しい環境にも当時小学1年生の私は徐々に慣れていった。とにかく外乱(テレビ)なく情報が入ってこない。2年間はTVの無い生活だった。がなく、楽しい日々を過ごすことができた。ここは鉱山の関連者の集落であり、特殊環境であった。

特にこの地での記憶に残っている主な事柄を記載したい。

(1)初めての友達達は猫ちゃん達。初めて社宅に行った時、夕方まで少し薄暗く、当時、半ズボンだった私の膝付近を急に毛のよ

うなものが擦れた。驚いて飛び上がる。下をよく見ると、猫の子だった。それまで小動物に縁がなく、初めて遭遇。ところが、冬の北海道は厳しく、とても夜は寒い。チビが布団に入ってきて、とても暖かった。チビのおかげで、極寒の北海道の冬を越せた感じが強い。そのチビが子を産み、チロ(2)が生まれ、2匹となり、チロも冬には布団にもぐってきて可愛い友達猫ちゃん達に出会えてとても良かった。

(2)小学校について。学年は約70名で2クラスあり、先生共に和気藹々とした雰囲気があり、楽しい印象が強かった。さらに、家から学校迄、歩いて3分弱。始業ベルが鳴り先生が教室迄来る時間よりも私が家から教室に着席する方が早い。昼食には自宅に戻る。後にも先にも、このような環境は無かった。

(3)遊びについて。冬は裏の川の一部分が凍るので、アイスホッケーを楽しんだ。夏は家の裏の川の上流でよく泳いだ。ある時、川の流れて泳いでいたら、目の前に蛇(おそらく青大将)が川を横切ってきた。ぶつかると、びっくり、何とか回避できた。帰りにはトマト畑あり、1個勝手にいたたいたりした。その新鮮さとみずみずしさは今でも忘れられない味の1つである。
(4)北海道の食べ物新鮮でとてもおいしい。

①夏の一日は近くの海に。一番近くである「石崎」の海に行くのが楽しみで、家族ぐるみで出かけた。小学生でも「雲丹」がたくさん取れ、その他多くの海産物を入れた味噌味の鍋でみんなと新鮮な海の幸を満喫した。

②山奥ゆえに、スーパーなどなく、日曜日には父が朝早くからさらに山奥に入り、川魚釣りをしていた。毎回30匹強の収穫でヤマメ、イワナ等その夕食には魚三昧、今思うととても贅沢なひと時だった。父は毛針で川魚を釣りしたが、友釣りをする鮎を釣るのは何故か苦手だったようだ。毎年、友釣りの鮎を釣り仲間内から貰っていたが、釣れず、結局友釣りの為の鮎を1回のみ、年、家族で食べた懐かしい記憶ある。

③ジャガイモの収穫期には母が急に今日学校を休めと言った。リヤカーを押して、帰りにリヤカーには山盛りのジャガイモ。ホカホカのジャガイモにバターをたっぷり、今でも忘れられない味である。その一方で確実に成果もあった。それは理科の授業で本より学ぶよりも、ジャガイモ堀を実際にする方がよく理解できることを痛感した。まさに「百聞は一見に如かず」である。最近、同級生から北海道の食べ物新鮮さが一味二味も違うし、その原材料で加工した物も同様においしいとする話を聞いて納得感があった。

その結果として、未だに続く小学校との同窓会。当時の北海道では一度仲間になると、受け入れてくれる気持ちの良さを感じていた。サラリーマン時代に札幌出張した時、同級生に到着した事を伝えると、すぐに彼から電話がかかってくる。「今

晩、若葉の同級生が6人参加するから来て」と言う。その晩は思いがけず楽しいひと時になった。同窓会も適宜実施していたので、当時のままの和気藹々さは今でも残っている。最近は今和5年(2023)9月に函館で12名の参加だったが、以前との雰囲気は変わらず。出会うから60年余りになり、半世紀以上を超えた付き合いである。鉱山の閉山(昭和61年・1986)後、皆が出会った学校は廃校、もう形も朽ちて、跡形もない。原野に戻り、「ここに小学校あり」の立て看板のみが残る。今は動物たちの元の楽園戻り、熊達の天下になり、大政奉還した形だ。もう簡単にはその地を訪れることは難しくなっている。それだけに寂しさもあるが、当時の仲間と再会し、懐かさも加わり、皆との同窓会を楽しみにしている。そして、「皆との合言葉」として、表題の『北海道の山奥の小学校が人生の出発点』に繋がるのである。

著者プロフィール

お 志崎 満夫



昭和25年千葉県館山市生:昭和50年山形大学工学部卒
同年三菱重工業(株)入社
機械加工・組立/据付・部品管理を担当、関連製品は①印刷・紙工・段ボール製造機では、プラントの据付で北京・上海に6ヵ月出張、特に中国の歴史の興味を持ち、その楽しみの本を読んでいる。
現在ジヨークサロン会員、
「野鳥」誌として会員への月刊誌「伝笑鳩」の送付を担当している。